庭園 協会ニュース 第91号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/

編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：2018 年（平成 30 年）1 月 31 日

オーナーの山縣有朋の好みを受け、小川治兵衛が自身なりに編み出した技法でつくりあげた無鄰庵の庭には、人の思いが込められている

日本庭園協会の昨日、今日、そして明日

龍居　竹之介

平成30年（２０１８）が明けました。皆さん、おめでとうございます。

そして大正7年（１９１８）生まれの日本庭園協会にとりましても、今年は百歳という記念すべきめでたい年に当たります。上原敬二先生の大変な奔走によって、本多静六先生をリーダーに頂き、庭園、公園、風景などが、建築を主体とした生活文化の中にどうあるべきかを、広範に見据え、考え、そしてその重要性を社会に広く訴えようと立ち上げた、前代未聞の組織、それが庭園協会でありました（創立時の会名は「庭園協会」です）。人の生活には豊かさが大切との考え方のせいか、家族ぐるみの見学も珍しくはありませんでした。ですから難しい専門団体というより、当初は〈庭園趣味協会〉の雰囲気もチラッと、ありました。

昭和13年（１９３８）に、建築士との同格を目標にした日本造園士会が誕生、技術者の地位確立を目指しましたが、庭園協会は創立以来の幅広い眼で住環境としての庭を探ることに努めました。しかし戦禍の激しさの増大とともに余儀なく休眠に入ります。戦後は昭和23年頃、再発足しましたが、何とか目覚めたのは昭和30年代で、結局は不振の日本造園士会との合併が契機でした。半面、戦前よりも会員構成が技術者主体となり、それも実力者揃いだったため、活動も若手への技術の指導、伝承が主体となりました。それが日本庭園協会の昨日、今日です。では明日はどうでしょう。まず創立当時の「各方面の有識者に協力を求め、利害を超越して庭園趣味を楽しむ懇親団体に」という上原先生の主張に、改めて眼を向けることが今後の道への第一歩かと私には思えてなりません。私は以前から日本庭園協会は、「日本の庭園」を語り、考える協会で、決して「日本庭園」の協会ではないと申し上げてきました。つくる立場、楽しむ立場、そしてその良さを周知させる立場など、それぞれの立場から、庭のありようを考え、その価値や魅力を探ることが、明日の心地よい住環境としての庭を育むことになるのだと私は確信しています。幅広い人材を持つ日本庭園協会はその活動の中心に立てる団体です。そしてそれが明日の姿です。（名誉会長）

新年のご挨拶

高橋　康夫

今、日本庭園協会
創立１００周年の第一歩を

日本庭園協会の皆様

良き新年をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。

本年は一般社団法人日本庭園協会が創立１００周年を迎える記念すべき年です。

昨年10月に会員の皆様にお願いをいたしました創立１００周年記念事業に対するご寄付につきましては、格別なるご厚情を賜りまして誠にありがとうございました。皆様のお志を強く受け止め１００周年記念事業を成功に導くため、決意を強くしたところです。

ところで、日比谷公園に大きなクスノキがあります。樹齢１００年を超えるこの樹は、もとは本多静六博士が公園整備の予算を削減され、苦肉の策として、樹木はいずれ大きくなるからと農科大学（東大の前身）苗圃から安くもらい受けたもので、開園時にはわずか1メートルにも満たない小苗木でした。それが風雪に耐え、関東大震災、戦災などを乗り越え堂々と枝葉を広げ、ビルに囲まれた都心の真ん中で人々の憩いのシンボルとなっています。

日比谷公園は本多静六博士の設計による日本で最初の近代洋風公園で、明治36年に開園しましたが、その15年後に庭園協会は誕生し、初代理事長は本多博士でした。日本庭園協会の足跡はこのクスノキの成長とほぼ同じに歩んでおり、百有余年を経て苗木が巨樹となったように、日本庭園協会も様々な苦難の道を乗り越え、１００年後の今、大きな枝葉を茂らせています。現在の会員５００有余名が正にクスノキの巨樹そのものと言えます。

さて、日本庭園協会創立１００周年記念事業は5月の東日本大震災復興記念庭園開園式典よりスタートし、10月に行われる記念式典や講演会でクライマックスを迎えます。また会員の皆様の「庭」に対する思いを掲載し、１００年後の会員の方々へのプレゼントとすべく、１００周年記念誌を発行します。

戌年は、今まで積み上げてきたことに一つの区切りをつけて新しい始まりに向けて準備を整え、次の世代へと生命を繋いでいくための年と言われています。

日本庭園協会が１００周年を迎えるこの時に私たちが居合わせることの奇跡をかみしめながら、先人たちのご努力に思いを馳せ、未来の会員へのメッセージをここにいる私たちが「今」を発信することに大きな意義があります。

会員の皆様と記念すべき１００周年記念事業を作り上げて行き、未来に向かって皆様と一緒にお祝いしましょう。

（会長）

樹齢100年を超す日比谷公園のクスノキ

望月敬生さん、淋しい～

龍居　竹之介

望月敬生さんが亡くなりました。悔しい現実に胸が痛んでいます。いまから思えば一昨年の冬、望月さんの咳がとても気になったのですが、「ただの風邪です」といって仕事に夢中でした。その後、病気が分かって「えらいものを背負い込みました。とにかく治さなくては」と連絡があり、やがて「家でリハビリします」などの電話があったり、そのたびに「ゆっくり休んで治して下さいね」などと、声をかけていました。しかし結局は、息子さんの敬士さんから悲しいお知らせが届くことになってしまいました。11月6日のことです。悔しいというか情けないというか、実に複雑な思いで敬士さんからの訃報を受けました。そのときなぜか、私を一寸睨んでは笑いながら「本当に人使いが荒いんだから」と口癖のようにいっていた望月さんの顔と言葉が、頭の中を駆けめぐっていたのは妙でした。望月さんのお名前を初めて知ったのは30年も前、早稲田大学のオープンカレッジで、私が日本庭園史の講座を開いたときです。担当職員の村井さんから「将来有望な若い社寺建築家に庭を学ばせたい」と頼まれたのが望月さんでした。こうして当の本人抜き、第三者の意見で望月さんの庭修行は始まりました。講座では優等生でした。遠出の見学の列車内では狭い手洗い場で大勢の受講生のためイチゴを洗っていたことが、いまも眼に浮かびます。講座のアシスタントになってもらったのは数年後、以来、20余年、近年、望月さん自身も建築講座を持つようになってからは、敬士さんにアシスタントは受け継がれました。当の望月さんは庭とは相性が良かったのか、いつの間にか大変仲良しとなったのには驚かされたものです。庭園協会に誘ったのも、庭が分かる建築家、それも貴重な社寺建築家で、庭の技術者と共同の世界をつくってくれればとの思いからでした。そして文化財庭園の整備にも力を借り出します。庭園協会としての仕事の一つ、小石川後楽園内庭の石橋修復は、その口切でしょうか。弘前の盛美園、松坂の北畠神社、新潟の貞観園などでも私は助けて貰っています。思えばずいぶん人使いが荒かったものと、いま改めてびっくりしていますが、やはり中でも望月さんを一番苦労させたのは、庭園協会の大事業であった国際日本庭園シンポジウムの裏方役だったと思います。特に早稲田大学で開催したときは大隈庭園、大隈会館、国際会議場の手配などの交渉ごとで、母校のこととはいえ、なにかと面倒な思いをさせてしまったものでした。仕事ができて人柄がよくて、心優しくて気配りも万全というと褒めすぎに聞こえますが、実際そういう偉い人がいることを、望月さんは私に気づかせてくれた人でもあります。この出来すぎの人に「人使いが荒い」といわれ続けてきた私は、望月さんの大好物のお酒を霊前に手向けつつ「ご免なさい」を連発していますが、生きておられるうちにいいたかったなと後悔しきりです。さて最後の〈荒い人使い〉のお願い。「法子夫人をしっかり見守って上げてね」。

さよなら望月さん。　（名誉会長）

ご自身設計の高輪 泉岳寺書院で説明して頂いた望月敬生さん

鑑賞研究部　秋季庭園見学会　平成29年11月14日～15日

東日本大震災復興記念庭園
作庭現場を含めた東北への旅

福田　光子

東京は長雨が続いた10月14、15日、東北はうす曇りの見学日和となりました。参加者は7名と少々寂しい人数でしたが、仙台駅からバスで東日本大震災復興記念庭園の作庭現場である伊達家ゆかりの覚照寺へ向かいました。高橋康夫会長、菊地正樹副会長、廣瀬慶寛塾長ら大勢の方が出迎えて歓迎して下さり、大変嬉しく思いました。復興記念庭園は来年の5月の開園を前にほぼ全容が整い、森林に囲まれ、ほどよい距離に山を臨む斜面に広がる庭の姿は、穏やかで心安らぐものでした。

この記念庭園は、大震災から2年あまり、いっこうに進まない被災地の復興にいらだちを感じながらも、「作庭を通じて復興に貢献する」との決意で、宮城県支部の記念事業として手弁当で始められたもので、本部との共催で「伝統庭園技塾」を開講し、現代の作庭技術の習得と若手技術者の育成の場ともなりました。この5年間で、塾生をはじめ全国から関わった人の人数は、３５００人にものぼるとのことです。

夕食会へ参加の皆様

毛越寺 志羅山総務部長による説明

震災で瓦礫となった石や廃材を使って、よくここまで素晴らしい庭園を造り上げたことと、関わられた皆様に敬意を感じました。

翌日の閉塾を前に催された夕食会へも参加させていただき、海外を含め各地から集まった方々との賑やかで楽しいひと時でした。「楽しかった、一生の友人を得ることができた、庭園協会に感謝します」との若い方の声に、技術の習得と共にお互いを高め合ってあのように感銘深い庭になったのだと思いました。

2日目は、作庭作業前に毎朝行われるラジオ体操に参加した後、津波で被災した南三陸町志津川に防災センターを訪ね、さんさん商店街で買物を楽しみましたが、ここまでの道のりに一方ならぬご苦労を感じました。

最後の見学地 毛越寺では、龍居竹之介先生のお計らいで、総務部長の志羅山氏にご案内いただきました。現在は大きな池だけが印象的ですが、ご説明によって、当時の大伽藍や寺町の様子が浮かび上がり、往時の威光を偲びました。

かつては権力者や財閥によって名園が築かれましたが、今日このような規模のものが、庭園協会を中心に、多くの人々によって自発的に造られたことの意義は大きいと思います。復興への強い思いと、実現への大変な努力に、東北の底力を感じると共に、人々が庭を作る意義を深く感じた見学会でした。

問もなくの開園をお祝いすると共に、早く復興して、おだやかな日常が戻りますようお祈りいたします。

（理事　鑑賞研究部）

平成29年度　支部活動報告

愛知県支部／石川県支部／埼玉県支部

愛知県支部
外空間に石積みの景を取り入れる
第3回石積み講座in世田谷　平成29年10月21日～22日
第11回石積み講座　平成29年11月11日～12日

目に映るものすべてが新鮮でした

大須賀　涼樹

私は今回の石積み講習で初めて石積みという技術に触れさせて頂きました。造園業界に入って日が浅いので、何も知識がない人間がこのような講座に参加して良いのだろうかととても不安な気持ちでした。ですが、自然や庭が大好きで自分で様々な庭を作りたくてこの世界に入った私にとって、この石積み講座はとても魅力的で、案内を頂いた時には石積みの技術はもちろん、他の参加者の方々や講師の方々の庭に対する考え方や向き合い方を伺って、吸収できるものは全て吸収したいと強く思ったことを覚えています。

当日は台風の直撃であいにくの雨でした。午前中は座学ということでテキストを頂いたのですが、このテキストの表紙に載っていた石積みがとても素敵で格好良く、こんなすごい技術をこれから体験できるのだとワクワクしていました。

いざ講座が始まると、縦目地が通らないように「品」の字で積むこと、横目地の通り石の大小の置き方でメリハリをつけていくことなど、景観重視の美しい石積を丁寧に教えて頂きました。石道具の使い方や石一つ一つが持つ顔、座りなどの実演もして頂き、座学の最後には石積みを「描く」こともしました。いざ描いてみると、石の大小の配置のバランス、目地の通り方など、様々な決まりを守って完成させるのがとても難しかったのですが、完成した石積みをまずは頭に描いてイメージすることの重要性を実感しました。

いよいよ実践が始まると、思っていた以上に難しく、根石を据えるだけでこんなにも悩み、石選びもなかなか決まらず、こんなにも大変なのだと実感しました。

2日目は朝から一日中必死で石と向き合い、積んで行きました。講師の方々に何度も質問したり、どうしても合端を気にしてしまう私に、正しい石の座り方を何度もご指摘して頂いたり、とても手のかかる生徒だったと反省しています。

しかし質問に丁寧かつ的確に分かりやすくお答え頂き、そのお陰でなんとか天端まで積み上げることができました。熱意あるご指導と、ご指摘があったからこそ、私自身もそれに精一杯応えたいと必死に取り組むことができました。

悪天候にもかかわらず頑張りました

鈴木富幸講師をはじめ、梅村龍太郎講師、西窪周二郎講師、倉繁望講師、兄弟子の荒川氏、スタッフの皆さま、大雨で肌寒い中、本当にお世話になりました。またさらに私自身、会社で日々勉強させて頂いたこともあり、今回は丁張までやらせて頂くことができ、ただ石を積むことだけではなく、この準備段階の大変さと重要性も知ることができました。そして、やりがいをとても実感できる経験をさせて頂き、2日間を通して目の前に映ること全てが新鮮で吸収できるものがたくさんありました。

このような実践的な講座の場を設けて下さりありがとうございました。今後も様々な技術を高め経験できるように日々精進努力を惜しまず続けていきたいと思います。

（会員師弟　成城グリーン勤務）

石積み講座に再挑戦

江黒　祐介

前回の石積み講座は充実していたものの、課題や後悔も山積みだったので再挑戦する事にしました。特に今回の課題としたのは、安全面と堅固で安定感があり、石の大小、長短の配置を大事にしてバランス良く時間内に積む事でした。

当日は、青空の下で座学から始まりました。前回は良く分からなかった事も講師の方々とコミュニケーションを積極的にとり、より深く理解する事ができました。2回目という事もあり、角の算木積みもやらせて頂きました。それと楽しみにしていたのが前回の講座で親しくなった受講生仲間との再会でした。今回も一緒に参加して私を鼓舞してくれました。とても心強い仲間です。

いよいよ石積み開始。前回講師の方々に指摘された事を一つずつクリアしていけて、いい感じになったかなと思っていたら、鈴木富幸講師に意外な方向から一言新たな指摘を受けました。大幅な修正になるかと思いましたが、やってみると、より安定感が出て上に積む石も据え易くなりました。ノミの使い方も、一言指摘され正してみると、明らかに加工し易くなりました。講師の方々はちゃんと見てくれていたのです。

夜の懇親会後の二次会でも予習復習と庭談義が深夜まで盛り上がりました。

2日目は時間の許す限り石積み実践です。結果的に、前回の課題はクリアできて、他の受講生達と達成感を味わえましたが、新たにより多くの課題を持ち帰る事になりました。石積みの深さと難しさを痛感しました。私にとってはそれも小さな一歩前進と捉えています。講座を準備し開催してくださった方々に感謝致します。ありがとうございました。

（正会員　神奈川県支部）

石と向き合った2日間でした

石川県支部
アカマツ剪定と雪吊り、灯籠・水鉢のコモ巻講習会
平成29年10月28日～29日

金沢の冬を迎える庭仕事

中野　公夫

1日目の講習は天気を考慮し「雪吊り」と「赤松の剪定」から始まりました。

事前準備した見本を見つつ、基本的な雪吊りの種類、扱う道具、材料の説明を講師の松本清氏、宮本広之氏が行い、縄の下ごしらえ、結び方、飾りの見本を作った後、グループに分かれて実際に松の真立（りんご吊り）を1本4～5人で仕上げていきました。

自分にとって、松の真立に梅飾りを天辺につけ「松竹梅」の縁起物とする事や美しい角度、間隔を数字化した説明は「実用半分見た目半分」と聞かされてきた曖昧な部分を裏づ

け、多様な結び方、飾りは庭師としてのセンス、粋が色濃く出る仕事であることを再確認する場となりました。

雪吊りも一区切りつき、1本の赤松を切り進めながら説明していく講習へと移り、複数回受講された方は勿論、熱心なやり取りが時間一杯まで交わされました。

徒長、繁茂した野木から剪定し始めた荒い赤松も少しは仕上がりに美しさを感じられる題材となった様に思った一方で、終了後の会話の中で先人が残した技術をふまえ新たな要素、視点で見る事や実証していく向上心を養う事の必要性を知ったことは大変有意義でした。

2日目は予報通り断続的に雨の降る中、倉庫にて講師の向川茂氏、池田市徹氏のもと荒川隆氏も加わり灯籠・水鉢のコモ巻講習が行われました。見本を見つつ、解説が進み前日同様に分かれて一つを仕上げていました。

剪定を終えたアカマツに雪吊りをする

石灯籠のコモ巻作業

時間が進む中で様々な技法、種類を地元参加者が意見を交わす場面をきっかけに、「藁ぼっち」や「梅飾り」等々それぞれが教え合い、そこにいる参加者全員が講師になり『探求の森』的な空間へと盛り上がり楽しいひと時となりました。

最後に今講習会後に当協会に入会する運びとなった横田宣郎、藤元蔵人、出島勇航各氏若手3名の熱意と行動力は清々しく、石川県支部に新しい風が入る兆しを感じとれたことは喜ばしく、講習会の場を毎回快く提供してくださる能登いこいの村の方々に感謝申し上げ結びたいと思います。

（正会員　石川県支部副支部長）

さっそく仕事に生かしました

池田　功

講習して頂いた要点を思い返しながら記述いたします。

雪吊り：目的は湿気のある雪の重みから枝折れを防ぐことであり、降った雪を割ることに意味があるという事でした。雪吊り縄は1分5厘から2分5厘で新潟産が使われていました。その縄には表裏があり、癖と扱い方を教えて頂きました。この時期になると新しい鋏を下すという昔からの教えがあるというのです。きっと切り口一つまで美の意識を持ち根気いる作業が戸惑うことなく行えるための教えであろうと思いました。吊り方は①りんご吊り②幹吊り③三ツ割の3種類を教えていただきました。りんご吊りは1本の長い支柱を幹に添わせて頭から縄を四方へ投げ落とし幹に結び付ける方法で、支柱の入れ方、芯の取り方が重要で縄の張り方については実害による優先順位やバランスの取り方等を教わりました。雪吊り縄の下準備を仕掛け作りと言っていました。手作りの加工台を使い身体全体を使って縄を捌く姿は冬の風物詩と思える光景でした。

アカマツ剪定：雪吊り同様、雪による枝折れ対策が根底にあり、剪定によってシンプルで美しい三角形の複合体を作り出していることを学びました。印象深かったのは主幹の上を渡るワタリ枝、折れ易いヒジ等を優先的に剪定し三又の真中を抜く鯖尾透かしは極力避けて野木調の自然樹形を大切にしている事でした。

西早稲田の甘泉園でさっそくやってみました

コモ巻：目的は灯籠や水鉢等の氷結によるひび割れ防止で、冬飾りとしても親しまれているようです。コモ材料は米産地である新潟産・山形産があり、厚い、薄い、肌理の細かさ等品質は色々なので自分で調達するしかなさそうです。灯籠には竿、中台から火袋、笠と下から上へコモを当てながらオリジナルなやり方で縄を巻いていました。裾の切り方、窓の開け方によって美の表情が変わってしまいます。これといった決まりはないのですが、美意識をもって作り上げる事が大切な事のようでした。

その他：時間の許す限り縄で桔梗結びを教わったり雪国の伝統技術に触れさせて頂く事ができました。受講前はアカマツ剪定から雪吊り、灯籠・水鉢のコモ巻と随分幅広く講習して下さるのだなあという思いでしたが、冬を迎える庭師のスタンスと理論が見えたような気がしました。無論一つ一つの作業に研ぎ澄まされた完成度があるのです。しかし、それだけを伝えるのではなく、厳冬と向き合う庭師の庭園に対する心遣いと鍛錬が知恵になり、この土地で営まれている事に気付かされました。私は東京の仕事に戻り、西早稲田の甘泉園で雪吊りを行いました。勿論、雪吊り飾りですが芯の出し方、縄のバランス等、教わったことを生かし、多少アレンジして役立たせる事ができました。

（正会員　東京都支部副支部長）

※アカマツ剪定については庭園協会ニュース68号に石川支部宮本広之講師による解説と図解が掲載されていますので併せて読んで頂くと良いと思います。

埼玉県支部

風のカタチ(石積みのベンチ)プロジェクト

埼玉県立近代美術館(北浦和公園内)
平成29年11月2日～3日
野良の芸術　さぎ山の現場
2017（さいたま市内）
平成29年11月7日～8日

子供たちの記憶に残るものづくり

石井　国義

埼玉県支部では、今年度の研修会で石積みベンチの作品「風のカタチ」を構築しました。埼玉県立近代美術館で年初に行われた「宝船展」という作品展に模型を出展し、準備を始めました。5月の連休明けから支部研修会を重ね、参加者の力を結集し、試行錯誤しながらつくり上げました。

多くの人に見て触って感じてもらえるよう、作品は公共の場所に設置し、移動することを前提につくり始めました。トラッククレーンを使うことを前提に、重量制限を考慮し、遺り形をつくり、基礎部分から2つに分割できるようにしました。接合部分は積み石を空積として、現場移設後に改めてモルタルを使って積み直すという方法をとりました。

石の加工に時間を費やしました

今回の作品は、風の形を表現するためにアーチ構造でのデザインとし、空積みでも落ちない様に石と石の接地面を寸分の違いも無い様に加工する必要がありました。この、石同士を正確に合わせていく作業に多くの時間を費やしました。また、風の流れる様子をイメージできるよう、小端積風の流れのある目地で積みました。会員それぞれがイメージを持って積み、その感覚を全員が共有できるよう互いに確認しあいながら作品をつくっていきました。

研修会での楽しみのひとつは、作業もさることながらお茶の時間です。その時々の作業の事、仕事の事など、普段会えない仲間達との何でもない会話もまた大切な時間に思えます。

9月初旬、私達がかねてから「風のカタチ」を公園に設置できるようお願いしていた近代美術館から連絡がありました。作品を常設とするには制約が多く難しいが、期間を設けての設置であれば可能とのことでした。そこで、埼玉県支部と近代美術館との共催プロジェクトを立ち上げ、近代美術館の開館35周年である11月に合わせて公園に設置しました。平成30年3月末までの展示とし、その間、ワークショップやシンポジウムを行います。

「風のカタチ」も今では公園の風景にすっかり馴染んでおり、子ども達が上がって走って飛び跳ね遊んでいます。これも私達の表現する庭の一部であろうと思います。子ども達の心の中に公園の石の上で遊んだ記憶が残ってくれれば、私達埼玉県支部の庭もずっと生き続けることができるでしょう。

（評議員　埼玉県支部長）

風をイメージする形の石積みのベンチ

編集委員コラム

木になる葉なし 9

柴田　正文

私事ではありますが一昨年12月から昨年の3月にかけて地球の南半球を船で一周してきました。アジアからインド洋を渡りアフリカ南東部、大西洋を横断し南米東海岸を南下し南極を垣間見て南米西海岸を北上。途中内陸のイグアスの滝、ウユニ塩湖やマチュピチュ遺跡に立ち寄り南太平洋の島々を経由し日本に戻ってきました。それぞれの寄港地は魅力的で興味は尽きませんでしたが、生身で地球を一周してきて強く感じた事は当たり前の事なのですが「地球はかけがえのない星なのだ」という事でした。絶海の孤島イースター島はポリネシアの人々が住み着いた当初は緑豊かな島でしたが、人口が増えてモアイ像も競って作り始め、木を切り倒し資源が枯渇して、気づいた時は手遅れで逃げ出すカヌーを作る木材も無くなっていたと言います。限度を超えた環境破壊は生き物すべての生存さえ危うくさせるのです。地球も限られた資源しかなく逃げ出す星も近くにはありません。2011年に亡くなったケニヤのワンガリ・マータイさんは緑の闘志と言われグリーンベルト運動を提唱しアフリカ大陸全土で5400万本の植林をし、持続可能な開発の推進に取り組み、民主主義と平和に対する貢献も評価され環境分野で初のノーベル平和賞を2004年に受賞しました。2005年来日の折、日本語の「もったいない」という言葉を知って感銘を受けたそうです。私たちも日々の仕事や生活の事が手一杯で先々の事に中々頭が回りませんが日本庭園協会創立100周年の今、100年単位くらいで先を見据えてみませんか。東京都支部では本部共催で100周年記念として定期的に「連続交歓講演会」を計画しています。2月11日の第1回は「木を植えるのは何のため」高野義武氏（NPO法人国際ふるさとの森づくり協会理事長）です。木を植え、庭を造り、鑑賞して心の糧とする。庭園の持つ魅力と力を再探求してみましょう。

アフ・トンガリキの15体のモアイ像　かつての島の景観はどんなだったろう

創立100周年記念事業 寄付金中間報告

平成29年12月31日現在

寄付金口数　196名　792口

内訳　60口…1名／40口…1名／20口…11名／11口…1名／10口…15名／6口…9名／4口…13名／3口…1名／2口…98名／1口…6名

寄付金額　3,960,000円

（1口：5,000円

目標額　8,000,000円）

おかげさまで皆様方の温かいお気持ちで目標額に向かっていますが、まだまだ記念事業を計画通り挙行するには不足していますので会員の皆様方のご理解とご協力が必要です。随時受け付けておりますのでよろしくお願い申し上げます。

日本・オーストリア庭園文化シンポジウム

藤枝 修子

平成29年11月24日

NPO環境再生理事長の坂本新太郎氏主催の「日本・オーストリア庭園文化シンポジウム」が11月20日～25日に開催され、オーストリア連邦庭園局副局長ダニエル・ローラウアー氏、シェーンブルン庭園及び日本庭園担当庭園管理者アンタル・フィツイ夫妻、当日本庭園コンサルタント及び通訳エベリン・斎藤・ラクナー氏らの4名が来日しました。京都、広島、都内の庭園、皇居などを訪問し、24日午後、日比谷公園の緑と水のカレッジで講演会とレセプションが開催されました。講演会前半は、龍居竹之介名誉会長の「日本の庭―四季を楽しむ仕掛けの場」で、日本の庭の変遷を時代背景などに触れながら、説明頂きました。続いてローラウアー氏から「オーストリア共和国の庭園と植物コレクション―帝政庭園から連邦庭園に至るオーストリアにおける庭園文化の発展」と題し歴史的展開、植物コレクションの現状が紹介されました。意見交換の場では、西欧と日本の庭園文化の違い、本質的価値観などの意見交換されとても有意義でした。

（常務理事　鑑賞研究委員長）